



International
Corporate
Communication
Symposium

日本広報学会創立10周年記念国際シンポジウム

広報が創る相互理解

～日中交流における対話と共創～

2005年8月7日(日) 於愛・地球博会場内ロータリー館

実施報告書

2006年2月

日本広報学会

目 次

はじめに	上野 征洋	……………2
------	-------	--------

【開会挨拶】

「開会挨拶」	張 富士夫	……………4
--------	-------	--------

【基調講演】

「拡大する中国市場と広報の役割」	鄭 硯農	……………7
「日系企業・中国事業のチャンスとリスク」	青木俊一郎	……………16

【事例報告】

「急成長する中国市場でのブランド浸透」	皆川 泰平	……………31
「中国のPR事情と消費財PR事例」	劉 希平	……………39

【パネル討論】

「中国社会の変化と広報のチャレンジ」	嶋原 信治	……………55
	杉田 敏	
	渡辺 浩平	
	徐 向東	
コーディネーター	青樹 明子	

【事業報告】

事業概要		……………83
プログラム		……………84
実施報告	濱田 逸郎	……………85

【記録写真】

記録写真		……………88
------	--	---------

はじめに

まず、初めに、国際シンポジウム「広報が創る相互理解～日中交流における対話と共創」の開催にご賛同頂き、講演、提言、討論、そして議論や交流の輪に加わって頂いたすべての参加者の皆様、さらにそれを支えて下さった方々に御礼を申し上げたい。

この国際シンポジウムは、日本広報学会の10周年記念事業のひとつの柱として構想されたものであり、これまでの学会活動の着実な歩みに、ひとつのマイルストーンを置く試みでもあった。そして、世界の人々が集う「愛・地球博」を会場に開催した。

私たちの広報・コミュニケーション研究の分野においても、この数年間、国際的な視野からの問題提起や研究報告が寄せられる比重が高まり、「経営体のあるべき姿の彫琢」をめざす学会の使命からも、国際化する社会の相互理解にテーマに求めたことは当然の帰結でもあった。また、相互理解のためには多様な価値観の尊重や文化の壁に対峙し、対話によって超克することが求められる。こうした課題に対する今回の成果については、ここに収録された鄭硯農、青木俊一郎両氏による「基調講演」、皆川泰平、劉希平氏による「事例報告」、そして5人の専門家によるパネル討論のそれぞれをお読み頂ければ、十分にご理解頂けよう。

個別の内容についての感想は紙幅の関係で省略するが、改めて読み直してみると、さりげない表現に箴言にも似た指摘があったり、ソフトな語り口に豊かな人格を垣間みたりと再発見の楽しみもある。今回は、国際シンポジウムとしての狙いを明確なものにすべく日本と中国との関係に焦点を絞ったものの、次のステップでは視野はさらに拡大することが構想されている。

今回の成果をひとつのステージに、私たちは次へ進まなければならない。「対話と共創」は、いま、始まったばかりである。

最後に、多大なご協力を頂いた中国国際公共関係協会、上海市公共関係協会、(財)経済広報センター、(社)日本パブリック リレーションズ協会の各位に改めて感謝申し上げます。

2005年12月
日本広報学会 理事長
上野 征洋

「広報が創る相互理解 ～日中交流における対話と共創～」

開会挨拶（要旨）

日本広報学会会長 張富士夫

日本と中国の間の経済交流はこの数年間急速に進展し、多くの日本企業が中国で事業展開する今日、地域社会や市場との相互理解を深め、よりよい関係を築いていくことが大変重要になってきております。

本日のシンポジウムは、両国の広報の専門家が一堂に会して意見交換を行う貴重な機会です。日中間のコミュニケーションのあり方についての熱心なディスカッションを期待しております。私はアメリカにおける約10年の事業経験から、グローバルな事業展開におけるコミュニケーションの重要性を強く感じ、またいろいろなことを学びました。その中で一番感じたことは、やはり国が違うところもいろいろと違うのかということでした。それぞれの国では、長い歴史や伝統・文化を背景として、生活様式や風俗・習慣が形成されています。従って、そのベースにある人の価値観やものの見方・考え方は、われわれとたいへん違っているということを実地での活動や生活を通じてしみじみと感じ、勉強しました。

日本で生活していて当たり前と思うことが、アメリカでは少しも当たり前でなかったということが多々ありました。また、日本の社会では、以心伝心とか暗黙の了解を得るとか、言葉をはっきり言わなくても分かってもらえるということがありましたが、アメリカでは全く通用せず、大きな誤解を受けることもありました。そういう意味で、外国へ来た言葉がすべてであり、自分が思っていることをきちんと相手に伝え、相手からもきちんと聞く、そういう言葉によるコミュニケーションがまず第一歩であると痛切に感じました。私が現地の社長で、副社長が米国人でしたので、相互理解を深めるため、いろいろな話し合いに多くの時間を費やしました。「なぜアメリカの人はこういうことを考えるのか、日本人は違うぞ」「なぜだ、なぜだ」という話しをしたことが、アメリカを理解するうえで、大変役立ったと思っております。

日本と中国は今、大事なときに差し掛かっております。お互いのビジネスも拡大していますし、友人も増えています。政治状況がやや難しいときですから、なおさら経済や文化が果たす役割が強まっていると思います。

トヨタ自動車も今中国で事業を進めておりますが、私はまず友好と信頼の上にビジネスは成り立つものだという考え方を強く持っております。中国とお付き合いする中で、一番大切なことは信義であると思ひ、従業員にも事あるごとに信義を重んぜよと言ってきました。正しいことをすると同時に、約束したこと・口に出したことは必ず実行する。そこからお互いの信頼関係が強くなっていくと思っております。

よりよい国と国の関係、お互いの経済の発展のためには、きちんと言葉でお互いを理解し合う、あるいは行動で信頼を得ることがなければ、その上にいろいろなものを築き上げ

たとしても砂上の楼閣になってしまうと思います。時間はかかりますが、土台としての固いきずなや強い信頼関係があることが大切で、そのためにはコミュニケーションが非常に重要です。

今日のこのシンポジウムがその第一歩となり、その成果が今後の中国と日本の経済的・社会的交流に大きな影響を与えるとともに、参加いただきました皆様方がその成果を十二分に活かしていただくことを心から願っております。